

## ハンセン病は今・・・菊池恵楓園（療養所）の今

## 回覧

### 【Q ハンセン病は今・・・？】

A ハンセン病は、「らい菌」によって、主に皮膚や抹消神経が侵される感染症の一つです。この菌の感染力は微弱で、感染しても発症することはきわめて稀です。また、昭和18（1943）年のプロミンに始まる化学療法剤の効果によって確実に治療できるようになりました。現在ではいくつかの薬剤を組み合わせた多剤併用療法（MDT）が広く行われています。

現在、約800名が全国13か所の国立療養所と1か所の私立療養所に入所しています。入所者のほとんどはハンセン病から回復していますが、後遺症があるため療養生活を送っています。

きくちけいふうえん

### 【Q 菊池恵楓園とは？】

A ハンセン病の療養所です。明治40（1907）年、「癩予防に関する件」が法律として公布され、これに基づき明治42（1909）年、九州癩療養所として開所しました。昭和16（1941）年には国に移管され「国立癩療養所」として現在の地（熊本県合志市）に開設されました。総面積18万坪の敷地があり、国内最大級の療養所となっています。

戦後、第二次「無らい県運動」のもと入所者が急増し、昭和33（1958）年には1734名に達しました。その後はプロミンの効果によって退所者が増加し、新発患者は激減しました。そして高齢化の進行などにより入所者は減少し、令和7（2025）年現在、101名（平均年齢87.5歳）になっています。

開所から110年が経過した園内には「隔離の壁」（患者の逃亡防止のために建設）や「監禁室」（無許可で療養所を出た者、所内の規約違反をした者、職員の命令に従わない者等を収容）など、今なおハンセン病の歴史を伝える建造物が残されています。

### 【Q 無らい県運動とは？】

A 無らい県運動とは、1930年代から1960年代にかけて日本で行われた社会運動です。この運動はハンセン病患者を県内から一掃し、療養所に強制的に隔離・収容することを目的としていました。官民一体となって患者を摘発し、療養所へ送り込むという活動が全国的に展開されていたのです。

この運動の背景にあったのは、この病気は恐ろしい不治の病であり、感染した場合は二度と元にもどらないという誤った思い込みがありました。

一般市民もハンセン病患者の監視や通報を奨励され、「患者の存在を知ったものは無記名で投書せよ。」と隣人による密告をさせられたのです。

戦時中に中断された後も、戦後「第二次無らい県運動」として強化され、厚生省が各都道府県に事業の徹底を求めました。

### 【Q 運動がもたらした影響は？】

A 差別と偏見が助長されました。ハンセン病は「おそろしい伝染病」という誤った認識が社会に広まり、患者や家族に対する差別・偏見が定着しました。患者は療養所以外に居場所を失い、家族も地域から排除されました。療養所では断種や人工妊娠中絶が行われるなど、患者の人権は完全に無視されました。

2001年の熊本地裁判決では、この無らい県運動が、今日まで続くハンセン病患者に対する差別・偏見の原点であると違法性が指摘され、国による賠償が命じられました。

しかしながら、2003（平成15）年、南小国町のある温泉ホテルが、恵楓園入所者の団体の宿泊を拒否するという事件が起こり、大きな社会問題となりました。このことは今もなお、根深い差別や偏見が社会に残っていることを物語っています。

## 〇コロナ差別と似ている・・・克服のためにできることは～どんなウイルスが入ってきても～

コロナでもハンセン病でも、患者や関係者への差別が起こる根源は、感染者が「社会にとって迷惑な存在」とされてしまうところではないでしょうか。コロナ禍を思い起こせば、集団感染などがおこり報道されると、そうしたところへ手紙やネットを介して批判や中傷があらわれる状況となり、感染が知られた本人や家族は息を潜めて生きていくしかない状況が多発していました。患者さんは「被害者」、周囲は「拒否」ではなく、包容を・・・社会を挙げて守りましょう。差別はされる側の問題ではなく、差別する人＝人権を守れない人がいることが問題なのです。

人権を尊重し合うこと、倫理観を磨くことが偏見差別に気づけるようになる第一歩です。

## 「障がいがある方との関わり方」

(二〇二四年度 日出町人権フェスティバル 町長賞)

豊岡小学校 受賞当時五年 井本 唯

みなさんは、障がいがある方のことを、どう思っていますか。私は、他の人たちがうとこはあるけれど、みんな同じ人だからやさしく接することが大事だと思います。このようにおもったのは、あることがきっかけでした。

私の家の近くに、お年寄りのおじいちゃんがありました。そのおじいちゃんは病気で目が見えません。そのため、外に出かけるときには、白いつえを持って、ヘルパーさんというお年寄りの方のお手伝いをしてくれる方に支えてもらいながら、歩いているのをよく見かけます。前までの私は、(大変そうだな。)としか、思っていませんでした。

この前、「認知症サポーター養成講座」という授業を受けました。障がいの事とは違う所があるけれど、たくさんのお話を学びました。その授業では、認知症の方との接し方や、その人の気持ちなどについて知りました。そして、私は、(障がいと認知症はちがう所があるけれど、関わり方により変わりはしない。)と思うようになりました。

このような経験から、私は、障がいがある・ないに関係なく、相手の事を大切にしたいなと思うようになりました。他の人よりも困難を抱えながらも、力強く生きている人がいることが、すごいと思います。そして、これからは、どんな人にもやさしく接することが出来る存在になりたいです。



## 人権フェスティバル講演会

### 「平和のバトンをつなぎます」

～被爆体験を語り継ぐわたくし～

被爆体験を語り継ぐ「語り部」<sup>やぎ みちこ</sup> **八木 道子 さん**

12月6日(土)10:30～ 日出町中央公民館ホール



(講師プロフィール)

●1939年長崎市生まれ 現在86歳

●1945年に長崎市立伊良林国民学校に入学。その年の8月9日に原爆被爆。

1959年に長崎県立短期大学卒業後、両親と同じ教職員の道に進み、市内の小中学校に38年間勤務し、1997年に退職。「教員の退職はあっても、被爆者の退職はない。あなたは今から、被爆体験を話さなくちゃ。」という、『被爆教師の会』の先輩に背中を押され、長崎市平和推進協会、継承部に参加。

県内の小・中・高の学校はもとより、修学旅行の平和学習や県外の学校など、『長崎を最後の被爆地に』との強い願いを込めて、被爆体験を語り継ぐ「語り部」の一人として現在も活動中。

●原爆投下後、兄弟と一緒に逃げこんだ防空壕の中の様子が忘れられない。家族の無事を確認したり、水を求めたりする声がトンネル内に反響し、恐ろしかった。女学校の教師をしていた母親が、学校から戻ってきて再会したときに初めて泣いた記憶がある。